

体育授業における子どもの「やってみたい」を引き出す指導とは

藤田 日菜 （ 愛媛大学 ）

1. 目的

本研究では、エスノグラフィーの手法を用いて筆者が対象学級に「積極的な参与」（柴山，2006）をしながら観察を行い、体育授業における子どもの「やってみたい」を引き出す指導方法やアプローチの仕方及びその課題を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

まず学級担任に対して、体育授業や子どもの主体性に関するインタビュー（単元前）を行った。その後参与観察を行い、児童の学習行動の背景には教師のどのような指導やアプローチの工夫があるのかについて、文脈を読み取った。

対象者：愛媛県T市立の公立小学校3年生の学級担任（H教諭，教職歴15年以上），児童数30名（男子16名，女子14名）

調査時期：令和6年10月28日～12月5日

分析方法：参与観察時の動画から、学級担任へのインタビューや児童の振り返りを踏まえて、児童の行動の背景にある教師の指導の工夫を事例的に考察した。

3. 結果と考察

参与観察によって得られた5つのエピソードについて、インタビューの結果を含め考察した。ここでは紙面の都合により抜粋，短縮して2つを示した。

エピソード1：動きやルールに慣れて主体的な発言が出てきた場面（5/10時間目）

ゲームを終えて、児童全体を集めてのふり返りの際の会話

H教諭：ボールを受けた人はどうしたい？

児童C：打ちたい！

【考察】児童Cから「打ちたい」という言葉が出てきたのは、児童にボールを受けた後の行動に着目させることによって「バレーボールは打って点を入れることが楽しい」ということを児童自身が再認識できたためだと考察した。5時間目になっ

て子どもたちはやっとな動きやルールに慣れ、徐々にスムーズなゲームを行えるようになってきた。これが「打ちたい」という思いにつながったと考えた。また、H教諭へのインタビュー結果の中で、子どもの「やってみたい」を引き出すために意識していることとして「教材の本質の面白さが何なのかを考える」という回答があった。H教諭は一貫して「バレーボールは打って点を入れるのが楽しい」ということを伝えていたが、その本質については、あくまで子どもから「打ちたい」という思い（声）が出てくるような指導が重要であることが推察された。

エピソード5：学級通信（バナナ）

H教諭は体育での毎時間の振り返りを子どもたちに書かせ、その一部を抜粋して学級通信に載せていた。学級通信には子どもたちの振り返りだけではなく、H教諭がその振り返り一つ一つにコメントを書いており、「学級づくりの中の体育授業」を大切にしているH教諭の思い（インタビューの結果より）が感じられるものであった。これにより、子どもたち自身にいろいろな気づきを与えることが可能となり、それが子どもの「次はこうしてみたい」「こうしたらどうなるかな」といった主体的な発言や行動につながっていたと考えられた。

4. 結論

本研究では、子どもたちの主体的な姿の背景にある指導について、主に3点明らかになった。

1 点目は体育授業はあくまで学級づくりの中にあること、2 点目はみんなが楽しめる易しい教材にすること、3 点目は教えすぎないことである。以上の3点は、どれか一つだけ行えば子どもの主体性を引き出せるというわけではなく、相互に関連し合いながら学習者に影響を与えていることが示唆された。

<主な参考文献>

1) 柴山真琴(2006)子どもエスノグラフィー入門—技法の基礎から活用まで，新曜社。